

「創作」から「運動」へ

—佐木隆三における表現（1956－1964）の軌跡—

西田 心平

はじめに

本稿の目的は、佐木隆三の作品をたどることで「創作」から「運動」へと至る表現の軌跡を浮かび上がらせることである。そのことを通じて、北九州における文化運動の系譜の一端を明らかにしてみたい。「創作」から「運動」へといっても、佐木の場合、その軌跡は必ずしも単純なものではない。あくまで「創作」がベースとしてありつつ、そこに「運動」という要素が交わっていくといった、ある意味で螺旋的または複線的でもあるようなそれとして描くことができる。

ここでいう「創作」とは、佐木が生み出した長編や短編を含む小説作品、また戯曲や劇の脚本などのことを指す。一方、ここでいう「運動」とは佐木の作品がより社会的でありかつ左派的でもあるような傾向を示していく状態を意味している。こうした傾向の延長上に佐木自身が「文化運動」と名乗る集団的な文学の創造活動が現われてくる。その意味で、佐木は間違いなく北九州における文化運動の担い手の一人であった。

一般に佐木隆三と言えば、『復讐するは我にあり』など実際に起こった事件や実在する犯罪者などを多く扱ってきた作家として知られている¹⁾。2015年10月に78歳で亡くなるまで、佐木が残した小説やルポルタージュ、ノンフィクションなどの作品は数え切れない。その中で本稿が対象とするのは、佐木が文壇デビューを果たすより以前の表現活動である。それは佐木が北九州で働きながら、職場の社内雑誌や仲間と発行していた同人誌などに自らの作品を発表していた時期と重なる。

佐木が当時の八幡製鉄所で働き始めたのは1956年4月、自身が18歳の時であった。その後、64年7月、27歳で退職するまで、佐木は掌編まで含めると実に70編近くの作品を発表している。本稿が照準するのは、主に佐木のこの時期の表現活動である。その軌跡は、当時の八幡製鉄所における職場の変化や組合運動の動向か

ら少なからぬ影響を受けていた。それらの状況と関わらせつつ、佐木における「創作」と「運動」の交わりを具体的に描き出すこと、それが本稿の課題となる。

1. 検討の方法

本稿が佐木の表現活動の中でもとくに1956年から64年までのそれを対象とするのは、北九州における文化運動の系譜の一端を知る手がかりが、この時期の軌跡に見出せると考えるからである²⁾。佐木はこの時期、職場の社内雑誌などに作品を発表するだけでなく、同人誌やサークル誌の発刊にも関わっていた。例えば、『日曜作家』、『新社会派』、『労働北九州』、『緑と太陽』といった雑誌がそうである。これらはいずれも当時の北九州における文化運動の水脈の一つであったと考えられる。

ただし、北九州における戦後の文化運動について考えるとき、一方で大企業が果たしていた役割も無視することはできない。当時の北九州において代表的な企業の一つが八幡製鉄所であった。その会社内の親睦団体である親和会教養部が発行していた雑誌が『製鉄文化』である。八幡製鉄所で働きながら『日曜作家』などに自らの作品を発表していた書き手の中には、『製鉄文化』にも投稿していた者が少なからず存在した。佐木もまさにそのような書き手の一人であったと言ってよい。

八幡製鉄所のような大企業が発行していた社内雑誌³⁾が、多くの従業員に表現の場を提供するものであったとするなら、『製鉄文化』もまた当時の北九州における文化運動の支流の一つであったと考えなければならない。ただし、企業が発行する社内雑誌と労働者が仲間どうしで発行していた同人誌やサークル誌では、その目的や性格は異なったものとならざるを得ない。その違いが書き手にとってどのように経験されていたのかを知る上でも佐木の軌跡は一つの参照例を提供するものとなる。

さて、こうした佐木の位置づけを踏まえながら、本稿では、佐木が作品を発表した社内雑誌や同人誌、サークル誌などを主な調査対象とした。すなわち、先述した『製鉄文化』、『日曜作家』、『新社会派』、『労働北九州』、『緑と太陽』が、本稿における検討の主軸となっている。加えて、調査の過程で『九州文学』や『九州作家』、『新日本文学』、さらには八幡製鉄所が発行していた時報『くろがね』、八幡製鉄労働組合が発行していた組合新聞『熱風』などにも発表していることが判明した。

これらの雑誌・時報・新聞などの調査を通じて、現時点で本稿において明らかに

できた佐木の作品は [別表]⁴⁾ のとおりである。佐木は 1956 年 4 月に八幡製鉄所に就職し、64 年 7 月、同所を退職した後、職業作家となるべく東京に移動した。佐木にとって八幡製鉄所で働きながら作品を生み出したこの約 9 年間は、同時に仲間との集団的な創造活動に取り組んだ歳月でもあった。その期間を「創作」と「運動」の交わりという点から描くならば、どのような軌跡が浮かび上がるだろうか。

次章では、仮説的に次の 3 つの時期に分けて論じていく。すなわち、「創作」の修練期（1956 年 4 月～59 年 2 月）、「職場での葛藤期（1959 年 3 月～62 年 2 月）」、「集団での創造期（1962 年 3 月～64 年 10 月）」である。佐木が入所した 50 年代半ば以降の八幡製鉄所では、第 2 次の合理化計画が推進されていた。それに伴い急速に職場社会の解体が進み、組合運動では右派の勢力が台頭していく。こうした状況の中で、佐木の表現活動はどう展開していったのか。以下、具体的に検討していこう⁵⁾。

2. 「創作」から「運動」へ⁶⁾

2-1 創作の修練期（1956 年 4 月～59 年 2 月）：「苦悩する主人公」の萌芽

1956 年 4 月、八幡製鉄所に入所した佐木がまず配属されたのが条鋼部鋼片課整理掛であった。銑鋼一貫工程において中心となるのは、「銑鋼→製鋼→条鋼→鋼板」というラインである。その中の条鋼部門において、鋼塊（インゴット）を圧延し半製品の鋼片をつくる分塊工場、三交代の 8 時間労働に従事することになったのが最初である。原料となる鋼塊に対してどれだけの重量の鋼片ができたのかを仕訳伝票に記入するのが、当時の整理掛の主な仕事であった（佐木 1999:3-4）。

佐木はいわゆる文学青年であったわけではない。「たしかに『八幡中央高校新聞』に、“小説”を發表したことはある。しかし、四百字詰めで七枚半ほどのもの」（佐木 1999:12）であり、それまで文学の修練を積んできたような経験があるわけではなかった。その佐木が、入所した年に初めて書いた短編小説が「白いズックと墓石」である。四百字詰め原稿用紙にして約 30 枚の作品であった。八幡製鉄所の親和会教養部が発行していた社内雑誌『製鉄文化』第 37 号に發表している。

この時、佐木は上司から「なにしろ、親和会教養部の雑誌に載ったとじゃ。二分塊掛の名誉やけん、もっと大きな顔ばせんかい」（佐木 1999:12）と励まされたという。これに対して、佐木は「夜勤のとき、（小説を書いていることが：引用者補足）

見つければクビになるかもしれないと悲壮な覚悟でいただけに、拍子抜けしたような気がしたが、これに味を占めてせっせと小説を書きはじめた」(佐木 1999:12-13)と回想している。事実、その後も『製鉄文化』や時報『くろがね』に投稿するべく、佐木は作品を書き続ける。

これらの作品で特徴的なことは、いずれも男女の関係をめぐるストーリーが多くを占めていることである。それは小学生や中学生の男女もあれば、当時の佐木の等身大である 10 代後半や 20 代の男女もある。例えば、先述の「白いズックと墓石」では、小学 6 年生の「河本恵美子」への「僕」と「ブンチン」の淡い恋心がモチーフとなり、『製鉄文化』第 41 号に掲載された「買い物カゴ」では、10 代後半の「僕」と「香川美代子」、その姉「香川葉子」との恋愛と嫉妬の感情が描かれていた。

このことは見方を変えれば、佐木が、会社が発行している『製鉄文化』や『くろがね』には、私的な出来事を題材にした作品を中心に発表していたということかもしれない。というのも、これらと性格が異なる作品については、意識的に別の雑誌に発表していたふしがあるからである。例えば、佐木は兄の深田俊祐らと 1958 年 1 月、同人誌『日曜作家』を創刊している。その第 2 号では、自身が「それなりに社会性を意識して書いた最初の小説」(佐木 1999:42)と述べる作品を発表しているのであった。

その作品は「胡坐の組めない英雄」という短編であるが、舞台は明らかに八幡製鉄がモデルとなった「九州製鋼」である。高校の野球部で活躍する少年が実業団でプレーすることを決意し大きな鉄鋼会社に入るが、練習や遠征が多いことから職場の同僚とうまくいかず、悩んでいるうちに試合中に負傷するストーリーであった。アマチュアスポーツの名門であった八幡製鉄所における事務員採用時の“スポーツ枠”の推薦入社に起因した労働現場のひずみを題材にしたものである。

このように、佐木にとって『製鉄文化』や『くろがね』に発表する作品と同人誌である『日曜作家』に発表する作品は、意識的に区別されていた可能性が高い。「会社の人が読んだら、なにか言うかもしれんなあ」と自身でも心配になる作品は、「身銭を切ったガリ版刷り同人雑誌」に発表していたようである(佐木 1999:43)。かといって「『日曜作家』だけでは、発表の場が足りなかった」(佐木 1999:44)のも事実で、当時隔月で刊行されていた『製鉄文化』や『くろがね』を中心に創作の経験を積み重ねていたようにも見える。

そのような修練期間の中で、佐木が身に付けつつあった創作上の視座を一言で特

徴づけるならば、「苦悩する主人公」の萌芽とでも言えるかもしれない。すなわち、この時期の作品から読み取れる主な特徴の一つが、主人公の苦悩を通して、両立し得ない二者（あるいは2つの世界）の感情（あるいは現実）が描かれていることである。主人公たちの苦悩は、後景にある二者（あるいは2つの世界）から生じるジレンマがリアルなものであればあるほど、それだけいっそう重苦しいものとなる。

そのことが典型的に表れている作品として、「野いちご」と「緋鯉」を挙げておこう。前者は『製鉄文化』第48号、後者は『日曜作家』第5号に掲載された作品である。「野いちご」のY製鉄所で働く「治郎」は、製鉄所がある華やかな「都会」と出生地である貧しい「農村」という2つの世界で苦悩する。「緋鯉」に登場する「エミイ」は、アメリカ人兵士とその兵士に乱暴された日本人女性との間に生まれた「アイノコ」である。母は自殺し、「おじいちゃん」と「おばあちゃん」に育てられる。

いずれの主人公の苦悩も作品の中で安易に解決に至ることはなく、描かれるのはその苦悩を生きる主人公の現実そのものである。そのような視座が、この時期の佐木の作品には濃淡の違いはあれ伏在していた。とはいえ、そこに必ずしも主軸となるテーマが存在していたわけではない。それゆえ、作品どうしの関係に一貫性があるようには見受けられない。だが、こうした修練期間の先にしだいに佐木なりのテーマが姿を現してくる。それが次の「職場での葛藤期」における表現活動である。

2-2 職場での葛藤期（1959年3月～62年2月）：労働現場のひずみへの眼差し

ここでいう佐木なりのテーマとは、先述の「胡坐の組めない英雄」の中で先駆的に表れていた労働現場のひずみに関するものである。佐木が入所した1950年代半ばの八幡製鉄所では、第1次合理化が完了し、第2次合理化へと設備の近代化がいっそう進められていく時期であった。その背景にあったのは、政府が打ち出した「経済自立五ヵ年計画」や当時の通産省による「鉄鋼需要長期二十ヵ年計画」、そして日本生産性本部がアメリカに派遣した「生産性調査団」の存在である（八幡製鉄所所史編さん実行委員会 1980:250-252）。

これらのことが当時の労働現場に与えた影響を一言で表すならば、「労務管理のアメリカ化」（熊沢 1986:128）であった。「一貫した合理化」と「転炉の増設」などを主張した前二者の「計画」を踏まえ、戸畑地区への新鋭鉄鋼一貫工場の建設計画が策定・実施された。と同時に、後者の調査団がアメリカで学んだIE（Industrial Engineering）の手法や高度の原価管理体制、ライン・スタッフ・システムなどが、

まずは戸畑の新鋭工場、そして八幡の製鉄工場へと順次採り入れられていったのである。

その際の要となった仕組みの一つが、1958年に導入された「作業長制度」であった。これはラインと呼ばれる指揮命令系統を、従来の「部長－課長－掛長－技術員－組長－伍長」から「工場長－掛長－作業長－工長」へと簡素化するものであった。その上で、作業長は現場作業員の中から登用されることになり、それまでの組長・伍長にはなかった広範な権限が与えられた。しかも、その後、作業長は非組合員となり、経営管理層の一翼を担う立場となる。

このことが当時の労働現場に与えた負の影響の一つが、職場社会の事実上の解体であった。ここでいう職場社会とは、一人ひとりの労働者がそれを通じて会社に属するところの仲間どうしの職場集団のことである。より具体的には、「おやじ」ないし「親方」と呼ばれる組長・伍長と若手作業員との相互協同的な関係性を指す。こうした関係が失われていくことで、一人ひとりの労働者は、結果的に「孤独」と「競争」の中で会社や仕事と向き合うことを余儀なくされていくのであった。

さて、こうした状況と向き合いながら、佐木が描いた作品の一つが『九州作家』第40号に掲載された「ゆるい地盤」である。佐木自身が「労働組合をテーマにして小説を書いたのは、『ゆるい地盤』が初めてだった」（佐木 1999:70）と述べるように、労働組合の支部役員選挙への立候補をめぐる攻防が軸となっている。舞台は八幡製鉄所がモデルの「九州製鉄」。主人公は自らの立候補に際して、組合支部長の「片山」と掛長の「浅江」、元共産党員の「岡野」との間で翻弄される「私」であった。

そして、この作品がきっかけとなり、東京の左派系雑誌『新日本文学』（1959年9月号）に発表したのが「ある動機」という作品である。「K製鋼」に勤める労働組合運動に無関心の若手労働者が、組合の臨時大会の開催を求める署名活動に軽い気持ちで協力したことがきっかけで、会社の懲罰委員会にかけられそうになるというストーリーである。組合支部長の「黒石」、会社側の「掛長」、組合運動に熱心な同僚の「原田」との間で苦悶する「僕」という構図は、先述の「ゆるい地盤」とよく似ている。

さらに、これとほぼ同時期の作品が、『日曜作家』第10号に掲載された「起重機」であった。主題は職場における安全競争の欺瞞である。作業に不慣れな「僕」が合図を誤ったせいで、勤続39年で定年直前の「浅原」に怪我を負わせてしまう。会社内の熾烈な安全競争の中で、「浅原」はこのことを口外するなど「僕」に告げる。

やがて労働災害が発生したことを聞きつけた組合支部の「村尾」が、事故について説明してくれと迫ることから、口止めされていた「僕」はジレンマに陥ることになる。

以上、3編の作品を通して伺えるのは、「創作の修練期」において伏在していた「苦悩する主人公」という視座が、この時期に顕在化してくることである。また労働現場のひずみへの眼差しがより先鋭化していったことにも気づかされる。この時期、佐木をこうした作品の創作へと促したのは、職場社会が解体していくことに対して労働組合が何ら抵抗基盤となり得ていないことへの危機意識であった。作品に登場する主人公たちの葛藤は、まさに現場における佐木自身のものであったと言える⁷⁾。

こうして主軸となるテーマが姿を現してくるに従い、佐木は発表の場を『製鉄文化』からしだいに『日曜作家』、『新日本文学』へと移していく。そこで、労働現場そのものを正面から扱う作品を発表していくのであった。例えば、「裏切られた兄」（『日曜作家』第14号）、「指」（『新日本文学』1961年8月号）、「内ポケットのピラ」（『日曜作家』第17号）などは、まさにそのような作品である⁸⁾。そして、こうした表現の延長上に佐木にとっての一つの集大成が生まれるのであった。

それが『大罷業』という作品である。『日曜作家』第15・16号に連載したものを、61年11月、『別冊日曜作家』にまとめて発表したものである。かつて八幡製鉄所で実際に起きた大争議を題材にしており、軌条工場で働く20歳に満たない主人公「辰吉」が、突如起こったストライキに背中を押されつつ、製鉄所との闘いに身を投じていく「俺の理由」を自問する物語である。「母」、「守衛長」、「嫂」、「伍長」、「朝鮮人夫婦」の間で、最後に主人公は「無産者、万歳！」という言葉をつかみとる。

この作品の舞台は、いうまでもなく佐木が向き合っていた同時代の労働現場ではない。だが、そこに込められたメッセージは、右傾化し会社の「御用組合」となっていく同時代の労働組合に対する批判であった。1920年に起こった実際の争議は、多くの起訴者と解雇者を出して敗北している。だが、八幡製鉄所もストライキに込められた要求の多くを受け入れざるを得なかった。佐木にとって「無産者、万歳！」とは、八幡製鉄所と闘ったかつての労働者を強く肯定する言葉であった。

なお、この作品を書き上げた頃、佐木は当時の妻、そして『日曜作家』を発行していた2人の仲間（小塩信二、栗山研三）とともに日本共産党に入党している。

2-3 集団での創造期（1962年3月～64年10月）：理想と現実の乖離

最後の時期を「集団での創造期」としたのは、佐木が同人誌『日曜作家』での活

動を経て、『新社会派』、『労働北九州』、『緑と太陽』など、いわゆるサークル誌を舞台とした表現活動に入っていくからである。ここで同人誌とサークル誌の一般的な違いについて触れる余裕はないが、あくまで佐木の軌跡としては、仲間内で始めた同人誌での活動から離れ、より社会的かつ左派的な表現活動の場を求めて、新しい仲間と新しい雑誌を立ち上げていった時期として捉えることができる。

日本共産党に入党してもなく、佐木は「なにか行動を起こさずにはいられない気持ち」（佐木 1999:115）から、八幡製鉄労働組合の中央委員選挙に立候補し、右派系の現職を破って中央委員兼総務支部長に当選している。62年4月のことであった。一方、それとほぼ同じ時期、佐木は共産党に入党した2人の仲間とともに『日曜作家』を脱会し、新たな雑誌『新社会派』を創刊した。仲間の1人であり、創刊号の編集人でもあった小塩信二は、「編集後記」の中で次のように語っていた。

新社会派なんて仰々^{アツアツ}すぎる、とのれんの親元みたいな顔をして、日曜作家の一人が皮肉った。ここにあつまった同人は、皆な日曜作家から、より自由な創造と批評のために抜け出て来た奴ばかりである⁹⁾。

佐木もまた同じ編集後記の中で、「われわれは、同じく八幡市から発行している『日曜作家』に拠っていたが、こうして新しい雑誌のために彼等と別れた」、「酒を飲むのと雑誌の批評は同じ土俵でやろうと協定が成立、くされ縁よろしく関係は続く」¹⁰⁾と述べていた。事実、『日曜作家』は編集人が佐木から増岡康毅へと引き継がれ、その後も発行は継続された。佐木らは63年4月、さらに『労働北九州』という雑誌を創刊するが、その際には双方の雑誌のメンバーは再び合流していくのである。

ところで、その『新社会派』第2号で佐木が発表した作品が「ジャンケンボン協定」であった。労働者5万人を使用する大製鉄所が不況に見舞われ、全労働者の半分の首を切らなければならなくなったことから、会社側と「御用組合」が紳士協定を結び、ジャンケンボンで退職者と残留者を決めるという風刺小説である。佐木はこの作品を書き直し、第3回新日本文学賞の短編小説部門に応募したところ、受賞作として『新日本文学』（1963年5月号）にも掲載されている。

しかし、この作品は日本共産党の機関誌『アカハタ』の文芸時評欄で酷評される。それを受けて、八幡製鉄総細胞委員会は佐木に対して「反党活動があったので党员権の行使を停止する」（佐木 1999:133）と命じた。63年5月頃のことである。一方、

これより約1年前、ちょうど佐木が中央委員兼総務支部長になった頃、八幡製鉄労働組合の執行委員で社会党の活動家でもあった中門英幸と出会っている。これが一つのきっかけとなり、63年4月、佐木は中門らとともに『労働北九州』を創刊するのであった。

さて、佐木が自らの表現活動を明確に「文化（文学）運動」という言葉を使って語るようになったのは、この『労働北九州』からではないかと思われる。例えば、創刊号の特集「鉄鋼労働者の未来像」の中で、佐木は「個性の回復期—文学による労働者の想像力探索」という論説を発表し、労働者による「文化（文学）運動」の必要性を強く主張した。そこには、企業や労働組合が主導する既存の文化活動を批判する次のような言及も含まれていた。

八幡製鉄労組では文化サークル協議会として組織され、短歌・俳句・川柳・写真・活花・演劇・詩・奇術・民芸・絵画と九つの団体が加盟している。そして、ほぼ毎月三千円ずつの助成金をもらっているが、はたしてどれほどの活動をしているのか。形式的に文化活動の必要を唱える執行部に応えるにふさわしく、これらのサークルの多くは独自の活動をとることなど忘れて、サロンのな雰囲気をつくることで満足している。しかも、さきに挙げたサークルのうち六つまで、会社の組織する親和会にも同時に加入している。なるほど文化活動に政治的感覚を凝らすのは危険とはいうものの、労組と会社の双方から援助を受けるサークルに、そもそも真の意味の「文化」が芽生える筈がない（傍点佐木¹¹⁾。

それゆえ、佐木は「これからの文学運動は、誰からも擁護されずに進めるべき」であるという。そのため「『一匹狼』となることも、またやむをえない」。だが、「せめて、円陣を組むことの出来る仲間くらいは、運動形成のためにも欲しいものである」と、佐木なりの集団での文化創造の展望について語っていた¹²⁾。

これ以降、佐木にとっての創作の場は、主に『労働北九州』となっていく。「スモーカー号」（『労働北九州』1963年5月号）、「断崖」（『労働北九州』同年6月号）、「同室三人」（『労働北九州』同年10月号）などは、すべてそこで発表された作品である。それだけではない。「感想ひとつ」（『労働北九州』同年11月号）、「豚生きろ」（『労働北九州』1964年1・2月合併号）などの論説もまた、佐木なりに「文化（文学）運動」のあり方を読者に向けて切実に問いかけようとする試みであったように思わ

れる¹³⁾。

だが、『労働北九州』が続いたのも約1年足らずであった。1964年2月に発行された同誌1・2月合併号では、冒頭で編集委員会による「『労働北九州』最終号にあたり」という声明文が掲載される。終止符を打つ主な理由として、月刊雑誌を維持していく上での財政上の困難と盗作問題があったことが挙げられた¹⁴⁾。続く同誌3月号では「労働北九州 — その一年」と題し、佐木自身が『労働北九州』は『緑と太陽』と名を改め、北九州国民文化会議の機関誌として発行されると説明していた¹⁵⁾。

北九州国民文化会議とは、佐木をはじめとした『労働北九州』のメンバーが63年8月から準備会を立ち上げ、「労働者の文化サークルにとどまらず、学者・文化人・政党・労働組合・市民・学生などとかつてない連帯」¹⁶⁾をつくるものとして、64年1月に設立した文化団体である。議長は佐藤信夫（北九州大学）、副議長は高田一夫（版画家）・中門英幸（八幡製鉄労組執行委員会）、事務局長は佐木が務めた。『労働北九州』を「発展的に解消」¹⁷⁾し『緑と太陽』に取り組んでいくことが目指されていた。

その『緑と太陽』の創刊にあたる4月号（通巻12号）に、佐木は戯曲「いざ舟島へ」を発表している。八幡製鉄所の演劇サークルが北九州芸術祭に参加するための上演台本として書かれたものであった。主題は宮本武蔵と佐々木小次郎による「巖流島の決闘」である。とはいえ、その内容は武蔵の恋人と小次郎の恋人が示し合わせ、2人に八百長の相打ちを持ちかけるというものであった。つい力が入り過ぎ小次郎を殺してしまった武蔵の姿に、佐木は日本共産党の教条主義に対する皮肉を込めたという（佐木1999:158）。

ところで、この時期に佐木に起こったことと言えば、日本共産党から除名されたことと八幡製鉄所を退職したことである。先述の「ジャンケンポン協定」をきっかけに党員権の停止処分を受けて以降、佐木の日本共産党への不信任は深まっていた。64年4月、総評が決定した4.17春闘統一行動への日本共産党の反対声明を受けて、佐木は中央委員兼総務支部長の立場からその声明に対する反対演説を行う。そこで発言がきっかけとなり、日本共産党から正式に除名されるのであった。

当時、条鋼部鋼片課整理掛から総務部総務課広報掛に移っていた佐木の仕事は、時報『くろがね』の編集であった。共産党から除名処分を受けた後、佐木は64年7月付で、八幡製鉄所も退職してしまう。だからといって、創作活動までを放棄したわけではない¹⁸⁾。だが、退職後しばらくはラジオなどの放送台本を書く仕事を通

して家族の暮らしを支えることになる。集団での文化創造への佐木の理想は、仕事と生活という現実の中でしだいに遠いものとなっていくのであった。

3. 佐木の軌跡から見える文化運動の系譜

以上、1956年から64年にわたる佐木の表現活動を大きく3つの時期にわけて検討してきた。「創作」と「運動」という2つの要素から論じてきた佐木の軌跡は、「創作」を通じた表現活動をベースとしながら、しだいにそこに「運動」という性格が交わっていったものであることがあらためて浮き彫りとなったのではないだろうか。そこで本章では、こうした佐木の軌跡を手がかりとしながら、北九州での文化運動の系譜の一端について、以下5点にわたって整理しておきたい。

第1に、佐木が表現活動を開始することになった雑誌『製鉄文化』についてである。八幡製鉄所の親和会教養部が発行していた同雑誌は、佐木らが発行していた『日曜作家』や『新社会派』などとは目的も性格も異なるものであった。だが、多くの従業員に対して表現の場を提供するものであり、佐木もまたその一人として自らの作品を発表し、創作のための修練の場としてきた。そのことが北九州において文化運動が育つ地盤として寄与してきた側面があることは決して軽視すべきではない¹⁹⁾。

第2に、とはいえ『製鉄文化』が北九州での文化運動において、重要な支流であったかという点では消極的な回答にならざるを得ない。というのも、2-1や2-2で検討したように、佐木自身、「社会性を意識して書いた」小説や自らの労働現場のひずみを題材にした作品などは『製鉄文化』ではなく「身銭を切った」同人誌などに発表することを常としたからである。つまり、佐木らにとって『製鉄文化』は、集団での文化創造のための媒体としては位置づけられていなかったと思われる。

第3に、上記2点を踏まえ、戦後の北九州における文化運動の水脈の一つとして、あらためて『日曜作家』から始まる『新社会派』、『労働北九州』、『緑と太陽』という雑誌の流れを確認することができる。もちろん、その流れは決してなだらかな道筋ではない。実際には、書き手どうしの考え方の違いによる離合集散や財政上の困難など多くの壁にぶつかってきた。だが、そのような中で絶えず新しい表現活動の場を求めてきた結果の一つが、こうした水脈の形成につながったと考えられる。

第4に、このような北九州における文化運動の一端を形づくった人物の一人として佐木隆三を挙げることができるとすれば、その運動が発した問いかけもまた佐木

が向き合った当時の労働現場の中から生まれたものであると考えることができる。つまり、「孤独」と「競争」に追い込まれていく鉄鋼労働者の現実とそれに抵抗できない組合運動への危機意識である。このことを「創作」というかたちで表現し読者に問いかけることが、佐木らが目指した文化運動の出発点にあるものであった²⁰⁾。

第5に、このような出発点が、しだいに北九州における企業と地域との関係そのものを問い直そうとする運動につながっていった。その一つが北九州国民文化会議の設立である。もちろん、その背景には五市合併にもとづく北九州市の発足と同時に誕生した革新市政の支えがあったことも事実である²¹⁾。だが、企業城下町といわれる北九州において、文化の創造を掲げつつ、文学や美術、社会科学、演劇など様々なサークルとの連帯を作り出そうとした運動の意義は評価されてよいと思われる。

おわりに

かつて鶴見俊輔は、50年代から60年代にかけて各地で生まれたサークル運動を「一条の煙」に例えたことがある（鶴見1976:7）。「公の記録」に残ることのないサークルの歴史は、そこにあったかどうかを確認することすら難しいほど、実際にはかないものであることをこのように表現した。佐木隆三の軌跡を手がかりに北九州における文化運動の系譜をたどってきた本稿の試みもまた、それゆえの限界があることも確かである。最後にそのことについて触れつつ本稿のまとめに代えておきたい。

本稿の限界を一言で要約するならば、佐木個人の軌跡を通してしか文化運動の系譜を明らかにできていないということである。つまり、本稿で明らかにできたことは、あくまで北九州における文化運動の一端にしか過ぎないということになる。その系譜が、前章でも確認した『日曜作家』、『新社会派』、『労働北九州』、『緑と太陽』という流れであった。だが、文化運動とは集団での文化創造の営みでもある。重要なのは、その運動を担った人々の間でどのような対話が行われてきたのかである。

本稿では文化運動の歴史を「系譜」や「水脈」という言葉を使って表現してきた。それは文化運動の歴史が必ずしも一本の直線で表されるものではなく、絶えず枝分かれしつつ、途中で途絶えてしまったり再び交わったりしながら、新しい何かを生み出そうとする動きの積み重ねであったと考えるからである。そのような動きの中で、対立や葛藤を含んだ様々な対話が重ねられてきた。その対話の中にこそ、担い

手や書き手たちの意思があり思想があったと考えなければならない。

だとするならば、必要となる作業は、今後も異なる水脈の流れを探しながら、同時にそれぞれの担い手たちによる対話の場面に光をあてることである。北九州における文化運動の系譜は、佐木の軌跡から浮かび上がるものだけではない。また文化運動の担い手どうしによる対話も様々なサークル誌を通じて交わされてきた形跡がある。これらを可能な限り明らかにしつつ、北九州における思想の輪郭を浮かび上がらせること。それが戦後の地方都市の現実を見つめ直すことにもつながるだろう。

【別表】佐木隆三における表現の軌跡（1956年10月～1964年10月）

発表年月	区分	作品名	著者名	掲載誌名	発行所	備考
1956年10月	創作	白いズックと墓石	小先良三	「製鉄文化」第37号	八幡製鉄所親和会教養部	
1957年1月	創作	中学生	小先良三	「くろがね」1,207号	八幡製鉄所	
1957年4月	創作	赤ちゃん	小先良三	「くろがね」1,216号	八幡製鉄所	
1957年6月	創作	買物カゴ	小先良三	「製鉄文化」第41号	八幡製鉄所親和会教養部	
1957年11月	創作	テレビ	佐木隆三	「くろがね」1,233号	八幡製鉄所	
1957年12月	創作	夫婦岩	小先良三	「製鉄文化」第44号	八幡製鉄所親和会教養部	
1958年1月	創作	白い封筒	小先良三	「日曜作家」創刊号	北九州日曜作家同人社	
1958年1月	書評	小説家	小先良三	「くろがね」1,237号	八幡製鉄所	
1958年2月	創作	散歩道	小先良三	「くろがね」1,240号	八幡製鉄所	
1958年3月	創作	胡坐の組めない英雄	小先良三	「日曜作家」第2号	北九州日曜作家同人社	
	書評	不安の倫理	神崎 勤	「くろがね」1,242号	八幡製鉄所	長兄の名前を借りて投稿。
	創作	野いちご	小先良三	「製鉄文化」第48号	八幡製鉄所親和会教養部	
1958年8月	創作	おかしな話	小先良三	「熱風」367号	八幡製鉄労働組合	
	随筆	職場の作家	小先良三	「くろがね」1,255号	八幡製鉄所	
1958年9月	創作	緋鯉	小先良三	「日曜作家」第5号	北九州日曜作家社	
1958年10月	創作	孝行息子	小先良三	「くろがね」1,263号	八幡製鉄所	
1958年11月	創作	黄色いりボン	佐木隆三	「熱風」375号	八幡製鉄労働組合	
1958年12月	創作	ある愛情	佐木隆三	「くろがね」1,268号	八幡製鉄所	
1959年1月	創作	雲仙まで	佐木隆三	「くろがね」1,270号	八幡製鉄所	
1959年2月	創作	梨どろぼう	小先良三	「九州文学」2月号	九州文学社	
	創作	金村少年	佐木隆三	「日曜作家」第7号	北九州日曜作家社	
1959年3月	創作	ゆるい地盤	佐木隆三	「九州作家」40号	九州作家社	
1959年5月	創作	侏儒の唄	佐木隆三	「日曜作家」第8号	北九州日曜作家社	
1959年7月	創作	ある死	佐木隆三	「九州文学」7月号	九州文学社	
	創作	才媛	佐木隆三	「くろがね」1,287号	八幡製鉄所	
1959年8月	創作	空梅雨の年	佐木隆三	「製鉄文化」第54号	八幡製鉄所親和会教養部	
	随筆	水のある風景⑤	佐木隆三	「くろがね」1,289号	八幡製鉄所	

創作の修練期（1956年4月～59年2月）

職場での葛藤期（1959年3月～62年2月）

「創作」から「運動」へ
 一佐木隆三における表現（1956-1964）の軌跡一

発表年月	区分	作品名	著者名	掲載誌名	発行所	備考	
職場での葛藤期（1956年3月～62年2月）	1959年9月	ある動機	佐木隆三	「新日本文学」9月号	新日本文学会		
	1959年10月	起重機	佐木隆三	「日曜作家」第10号	北九州日曜作家社		
	1959年11月	創作 錆びた機械	佐木隆三	「九州作家」第44号	九州作家社		
	1960年3月	創作 紅い滝	佐木隆三	「くろがね」1,311号	八幡製鉄所		
	1960年7月	創作 起重機	佐木隆三	「新日本文学」7月号	新日本文学会	59年10月の作品を加筆して発表。	
	1960年8月	ルポ 逆に激励されたオルグ	佐木隆三	「新日本文学」8月号	新日本文学会		
	1960年11月	創作 裏切られた兄	佐木隆三	「日曜作家」第14号	北九州日曜作家社		
	1961年3月	創作 母の客	佐木隆三	九州文学	九州文学社		
		創作 大罷業（連載第1回）	佐木隆三	「日曜作家」第15号	北九州日曜作家社		
	1961年6月	創作 大罷業（連載第2回）	佐木隆三	「日曜作家」第16号	北九州日曜作家社		
		ルポ 独占資本下の社外工	佐木隆三	「新日本文学」6月号	新日本文学会		
	1961年8月	創作 指	佐木隆三	「新日本文学」8月号	新日本文学会		
	1961年9月	創作 内ポケットのピラ	佐木隆三	「日曜作家」第17号	北九州日曜作家社		
		ルポ 見殺しにされた社外工	佐木隆三	「新日本文学」9月号	新日本文学会		
	1961年11月	創作 大罷業	佐木隆三	「日曜作家」別冊	新日本文学会	61年3月、6月に連載したものをまとめて発表。	
	集団での創造期（1962年3月～64年10月）	1962年2月	創作 宿老	佐木隆三	「新日本文学」2月号	新日本文学会	
		1962年9月	創作 蠅の告発	佐木隆三	「新社会派」創刊号	北九州新社会派文学会	
創作 票読み			佐木隆三	「新日本文学」9月号	新日本文学会		
1962年11月		創作 ジャンケンポン協定	佐木隆三	「新社会派」第2号	北九州新社会派文学会		
		論説 個性の回復期	佐木隆三	「労働北九州」創刊号	労働北九州社		
1963年4月		座談会 芸術運動の可能性II	佐木隆三	「新日本文学」4月号	新日本文学会	北村美恵、小関智弘らと参加。	
		創作 ミスター文書規程	佐木隆三	「新社会派」第3号	北九州新社会派文学会		
1963年5月		創作 スモーク一号	佐木隆三	「労働北九州」5月号	労働北九州社		
		創作 ジャンケンポン協定	佐木隆三	「新日本文学」5月号	新日本文学会	62年11月の作品を一部書き直して発表。	
1963年6月		創作 戯曲 断崖	佐木隆三	「労働北九州」6月号	労働北九州社		
1963年7月		ルポ 八十一万人の表情	佐木隆三	「労働北九州」7月号	労働北九州社		

発表年月	区分	作品名	著者名	掲載誌名	発行所	備考
集団での創造期（1962年3月～64年10月）	1963年8月	創作 地上	佐木隆三	「新日本文学」8月号	新日本文学会	
		論説 嘘ついでごめんなさい	佐木隆三	「労働北九州」8月号	労働北九州社	
	1963年10月	創作 同室三人	佐木隆三	「労働北九州」10月号	労働北九州社	
	1963年11月	論説 感想ひとつ	佐木隆三	「労働北九州」11月号	労働北九州社	
		論説 三分の理	佐木隆三	「現代の眼」12月号	現代評論社	
		論説 芸ドラ管見	佐木隆三	「労働北九州」12月号	労働北九州社	
	1964年2月	論説 豚生さろ	佐木隆三	「労働北九州」1・2月合併号	労働北九州社	
		創作 戦略村	佐木隆三	「新日本文学」3月号	新日本文学会	
	1964年3月	論説 労働北九州—その一年	佐木隆三	「労働北九州」3月号	労働北九州社	
		論説 北九州における最近の思想・文化状況	佐木隆三	「国民文化」第52号	国民文化会議	
		創作 いざ舟島へ	佐木隆三	「緑と太陽」通巻12号	北九州国民文化会議	
	1964年4月	座談会 なにをどう書くか	佐木隆三	「緑と太陽」通巻12号	北九州国民文化会議	久保田正文、浅川太郎らと参加。
	1964年5月	論説 総会屋の孤独	佐木隆三	「緑と太陽」通巻13号	北九州国民文化会議	
	1964年6月	論説 社会党と文化政策	佐木隆三	「緑と太陽」通巻14号	北九州国民文化会議	
	1964年9月	論説 文化運動屋の弁	佐木隆三	「緑と太陽」通巻16号	北九州国民文化会議	
	1964年10月	創作 コレラ	佐木隆三	「えすきぶと」創刊号	北九州国民文化会議事務所内	

別表注

- ・56年10月～64年10月の佐木の作品は上記リストで概ねカバーしている思われるが全てではない。
- ・同年月に発表された作品については、日付順ではなく基本的に「創作」が先に来るように記載した。
- ・「製鉄」の字については、雑誌により「製鐵」が使われている場合があるが、ここでは「製鉄」に統一した。

[注]

- 1) 佐木隆三（本名、小先良三）の経歴を簡単に記しておく。1937年、朝鮮咸鏡北道（現在の朝鮮民主主義人民共和国）に生まれる。41年に母と3人の兄弟とともに日本に帰国。44年から広島の小学校に通うが、50年には母の親戚がいた北九州の八幡に移る。53年、福岡県立八幡中央高校に入学し、56年に八幡製鉄所に就職。64年に八幡製鉄所を退職するまで職場雑誌（社内雑誌）や同人誌、サークル誌などに多くの小説を発表する。67年からの約2年間、東京の学習研究社に嘱託として勤務。その後も多くの小説やルポルタージュを発表し、76年、『復讐するは我にあり』で第74回直木賞を受賞。その他に『深川通り魔殺人事件』（1983年）や『死刑囚 永山則夫』（1994年）などの作品を残している。
- 2) 北九州における文化運動については、福岡市文学館（2011）、稲田・中西・今川（2012）、稲田（2013）、坂口（2013）が先行研究として挙げられる。とくに稲田（2013）は、「北九州の職場雑誌」展の企画を振り返り、「『北九州』という呼び名、そして『サークル誌』、『職場雑誌』という呼び名の境界のゆらぎ、そして、『五〇-六〇年代』を相対化しうる可能性」という3つの視座を提起している。本稿はその内の主に後者2点（『サークル誌』と『職場雑誌』という境界のゆらぎ）、『五〇-六〇年代』を相対化しうる可能性）を意識しつつ、北九州における文化運動の担い手の軌跡を通して、そのことを具体的に検討すべく努めている。
- 3) 本稿で「社内雑誌」という際、それは「会社の従業員を対象に発行された雑誌」といったニュートラルな意味で使用。それとほぼ重なる概念として「職場雑誌」と呼ぶことも可能である。だが、稲田（2013）が提起するように、この概念は「『職場』理解の立ち位置の相違」によって狭義にも広義にも解釈できる余地があり、それ自体が論争的である。『製鉄文化』が狭義の意味での「職場雑誌」と言い切つてよいかどうか、それ自体が検討の俎上にあるという意味で、あえて本稿ではこの呼び方は使用しない。
- 4) 別表のリストは、今回調査対象とした雑誌・時報・新聞の中でも現時点で筆者が収集することができたものに限られている。例えば、発行されていることが分かっている雑誌でも消失しているものがあり、現時点で未発見のものも少なくない（例えば、『日曜作家』第2・3号など）。
- 5) 以下の2章の検討に際しては、[別表]に示した作品のすべてに言及するわけではない。筆者が仮説的に分けた3つの時期について説明する上で、最も典型的な作品と思われるものに絞って取り上げる。
- 6) 2章において[別表]にある作品の中から引用する場合は、すべて[注]にて作者、作品名と頁数を示す。また[参考文献]の中から引用する場合は、本文中にて作者、年、頁数を示す。
- 7) 当時、鉄鋼労連（日本鉄鋼産業労働組合連合会）を主導する大手6社（八幡製鉄・富士製鉄・日本製鋼所・住友金属工業・神戸製鋼所・川崎製鉄）の中でも、左右両派の勢力

が絶えず拮抗する状況にあったのが、最大単組でもある八幡製鉄労働組合であった。59年に起きた統一闘争では、八幡労組は第2波ストに参加するのみで、それ以降、統一闘争には加わっていない(松崎 1991:170)。この時期、八幡労組はますます右傾化の度合いを強めていた。

- 8) 同様に、この時期「独占資本下の社外工」(『新日本文学』1961年6月号)、「見殺しにされた社外工」(『新日本文学』1961年9月号)など、八幡製鉄の下請労働者の組合運動を扱ったルポルタージュ作品を書いていることも注目される。
- 9) 小塩信二、1962(8)、「編集後記」『新社会派』創刊号、68頁。
- 10) 佐木隆三、1962(8)、「編集後記」『新社会派』創刊号、68頁。
- 11) 佐木隆三、1963(4)、「個性の回復期 — 文学による労働者の想像力探索」『労働北九州』創刊号、8頁。
- 12) 佐木隆三、同上、11頁。
- 13) 前者では「ジャンケンボン協定」への批判を取り上げながら、後者では『鉄火』など北九州州での他のサークル誌への批判を試みながら、文化運動のあり方を自問している。
- 14) ここでいう「盗作問題」とは、国民文化会議が主催した文化祭詩部門において、『労働北九州』に掲載された詩が佳作に選ばれたにもかかわらず、それがかつて別の雑誌に掲載された詩と同一作品であることが発覚した問題のことである。
- 15) 佐木隆三、1964(3)、「労働北九州 — その一年」『労働北九州』3月号『緑と太陽』準備号、1頁。
- 16) 佐木隆三、同上、8頁。
- 17) 佐木隆三、同上、7頁。
- 18) 1964年10月、佐木も同人名簿に名を連ねる雑誌『えすぎぶと』が創刊される。ここでは関門海峡が舞台となった「コレラ」という作品を発表している。
- 19) 『製鉄文化』という雑誌が、会社(あるいは資本側)が発行する狭義の「職場雑誌」であるということと言えるかもしれない。しかし、本稿のささやかな検討から伺えることは、書き手にとって、(少なくとも50年代後半までは)『製鉄文化』のような「職場雑誌」は必ずしも「同人誌」や「サークル誌」と敵対する関係にあるものとは受け止められていなかった可能性が高い。
- 20) このことは、佐木らの表現活動が自らの「職場」と相対しながら、一方で労働組合からも一定の距離をおきつつ取り組まれていたものであることを物語っている。こうした事実の中に、私たちはサークル誌を媒体とした文化運動の特徴の一つを見出すことができるかもしれない。
- 21) 吉田法晴革新市長とのタイアップは『労働北九州』から始まる。例えば、創刊号では労働北九州編集委員会による「発刊の言葉」の次に吉田法晴による「初代市長に当選して」という文章が掲載されていた。また『緑と太陽』という誌名は吉田市長のキャッチフレーズ「緑と太陽の街づくり」からとられたものである。

[付記]

本稿で検討の対象とした雑誌（とくに『製鉄文化』、『日曜作家』、『新社会派』、『労働北九州』、『緑と太陽』）の収集と閲覧、撮影等については、所蔵元である北九州市立文学館様から多大なご協力を頂いた。この場を借りて感謝申し上げたい。

なお、本稿は文部科学省 2018-2022 年度 科学研究費基盤研究 (C) (課題番号：18K02036 / 代表：西田心平) の助成による成果の一部である。

[参考文献]

- 50 年史編纂委員会、1995、『熱風の軌跡 新日本製鐵八幡労働運動 50 年史』新日本製鐵八幡労働組合。
- 福岡市文学館、2011、『サークル誌の時代 労働者の文学運動 1950-60 年代福岡』福岡市文学館。
- 稲田大貴、2013、「北九州文学館 第 13 回特別企画展『働き、書いた — 北九州の職場雑誌展』その概要、ならびに成果と課題』『近代文学論集』第 39 号、21-28 頁。
- 稲田大貴・中西由紀子・今川英子、2012 年、『図録「働き、書いた — 北九州の職場雑誌展」』北九州市立文学館。
- 伊藤正直、2020、『戦後文学のみたく高度成長』吉川弘文館。
- 熊沢 誠、1986、『職場史の修羅を生きて 再論日本の労働者像』筑摩書房。
- 松崎 義、1991、「鉄鋼争議（一九五七・五九）— 寡占間競争下の賃金闘争 —」労働争議史研究会編『日本の労働争議（一九四五～八〇）』東京大学出版会、161-204 頁。
- 道場親信、2011、「国民文化会議と北九州国民文化会議 第 5 回戦後文化運動合同研究会報告。
- 西田心平、2017、「戦後サークル文化運動の問い — 1950 年代に照準して —」『基盤教育センター紀要』第 29 号、137-172 頁。
- 西田心平、2021、「親和会の系譜 — 『製鉄文化』への視座 —」『基盤教育センター紀要』第 35-36 合併号、北九州市立大学基盤教育センター、79-94 頁。
- 社史編さん員会、1981、『炎とともに 八幡製鐵株式会社史』新日本製鐵株式会社。
- 坂口 博、2011、「北九州国民文化会議の活動」第 5 回戦後文化運動合同研究会報告。
- 坂口 博、2013、「戦後文化運動研究の現在と課題』『近代文学論集』第 39 号、1-8 頁。
- 佐木隆三、1999、『もう一つの青春 日曜作家のころ』岩波書店。
- 鶴見俊輔、1976、「なぜサークルを研究するか」思想の科学研究会編『共同研究 集団 サークルの戦後思想史』平凡社、3-21 頁。
- 宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編、2016、『サークルの

西田 心平

時代」を読む 戦後文化運動研究への招待』影書房。

八幡製鉄労働組合編、1957、『八幡製鉄労働運動史』上巻、八幡製鉄労働組合。

八幡製鉄所編、1953、『八幡製鉄所労働運動誌』八幡製鉄株式会社八幡製鉄所。

八幡製鉄所所史編さん実行委員会、1980、『八幡製鉄所八十年史 総合史』新日本製鐵株式會社八幡製鐵所。